

ツミは複数の換羽様式を持つ非常に稀な鳥だった—ツミには2つのグループがある？

○伊関文隆(希少生物研究会)・佐藤達夫(行徳野鳥観察舎)・三上かつら(バードリサーチ)・片岡宣彦(椋鳥類環境)・梶田学

ツミ *Accipiter gularis* は主に東アジアで繁殖し、東南アジアにて越冬する猛禽類で、3亜種に分類されている。国内では先島諸島に亜種リュウキュウツミ *A.g.iwasakii* が留鳥として生息、それ以外の全国に亜種ツミ *A.g.gularis* が夏鳥または留鳥として生息するとされている。ロシア南東部、中国北東部、朝鮮半島などには亜種 *A.g.sibiricus* が夏鳥として分布している。

渡りのルートはまだ解明されておらず、断片的な観察記録しかない。九州北西部で見られる春の渡りでは5月に個体数が多く、これらは渡りの方向から、ハチクマのように朝鮮半島を経由して飛来したものと推測される(伊関私信)。青森県竜飛岬を北上する渡りもピークは5月中旬である(信州ワシタカ類渡り鳥類研究グループ 2003)。しかし、本州(東京・栃木)では3月中に繁殖活動が始まることが知られており、これらは渡りをおこなう個体群とは異なる個体群である可能性が考えられる。

今年の鳥学会において、「ツミはタカ科であるが、一般的なタカ科とは異なる換羽をしており、その換羽はハヤブサ科と同じタイプのものであったと考えられた」という発表を行った。これらは、春(5月)の福岡で観察された渡り個体(19個体)をもとに推定したもので、同様の換羽様式は、福岡で繁殖した個体(2個体)、新潟で12月に得られた標本(1標本)にも当てはまる。これらの個体は換羽の開始時期が早く、渡る前に越冬地で一部を換羽している、という共通点があった。

今回、さらに収集できた情報から、別の換羽様式を持つ可能性が高いツミもいることがわかってきた。得られた情報は、P1のみ換羽した個体(愛媛・繁殖1個体)、P1は不明だがP2~P4が換羽した個体(沖縄・繁殖1個体)、P6のみ旧羽の個体(福岡・渡り1個体)、P6,7のみ旧羽の個体(福岡・渡り1個体)など計6個体である。これらの個体が同一の換羽をしているとすると、P1からP5(内から外)に向かって順番に換羽するとともに、P10からP6(外から内)に向かって換羽していると推測される。ちょうどハヤブサ科と逆の換羽様式だといえる。これらの個体は、6月末にもかかわらず初列風切羽根を1枚しか換羽していない、秋の渡り時期に換羽が終了していないといった、換羽の時期が遅いという特徴を持っている。

熱帯で越冬する種の中には越冬地で換羽をする種が知られている(ハチクマやチゴハヤブサなど)。熱帯の気候風土が換羽の開始を早めるのだとすると、ハヤブサ式換羽タイプのツミも熱帯で越冬している可能性が考えられる。逆に、換羽の遅いツミは、熱帯より北に越冬地をもつ個体群であるのかもしれない。近年、サシバでは2つの渡りルートと越冬地の存在が判明しつつあり(菅澤ほか 2011)、一つは東日本で繁殖、南西諸島にて越冬し、渡りは主に太平洋沿いと南西諸島を往来するものである。もう一つは九州北部で繁殖し、フィリピンで越冬する。秋は南西諸島経由で南下するが、春は中国を北上し朝鮮半島経由で繁殖地に戻るというものである。現在、ツミについて同様の情報は殆どわかっていないが、仮に似たパターンがあるとすると、換羽、渡りルートおよび越冬地が異なる2つのグループが存在することがよく説明でき、今後多方面からの情報・解析が待たれる。

菅澤承子・山口典之・時田賢一・東淳樹・平岡恵美子・土方直哉・伊関文隆・樋口広芳(2011)衛星追跡によるサシバの渡り経路および経路選択様式. 第58回 日本生態学会全国大会

梅谷英夫氏、吉岡俊朗氏には多数の情報を提供していただいた。お二方に心よりお礼申し上げます。